紹介

寺川俊昭著

『教行信証の思想』

本多弘之

この書を読んで、言葉というものの秘義とでもいうのか、言葉が内に秘めている意味の解明の大切さということを改めて教えられた。人間が使う言葉は、その連鎖の中で、その言葉が担っている多義性の中から、それがある意味を指定し表現するということの繰り返しによって、言葉の意味が特定されていく。したがって言葉そのものが、人間の歴史と等しいような時間的背景を持ち、人間が持つ社会性と等しいような同時代の言葉群との連関関係をもって存立しているのである。どのように幅をきかせた言葉であっても、日常に使用されなくなれば、「死語」となっていくし、新しい雰囲気を言い当てるためには、新しい言葉が誕生してくるものである。そういう歴史・社会の流動する情況と共に、言葉のもつ作用や意味、つまり共通了解されうる含意も変化していくものであろう。言葉それ自体のもつ性格が、民族や社会生活、時代思潮や価値体系を映しつつ、流動的であるといえるのであると思う。

宗教経験は、人間の諸経験の中にあって、独自の領域をもつとすれば、それは絶対性とか超越性といわれるような面をもつところにあるといえる。それは、あらゆる内在性を包みこんだ超越性であり、あらゆる有限性をそのままに置いている無限性である。そういう原体験としての覚醒を、人間の諸情況の中で持続するものとし、多くの人々の共通の基本体験としようとするならば、その経験そのものを、人間の生活感覚を表現している言葉でいい当て、その生活感覚が構成している人間の諸経験の中へ積極的に訴えていかねばならない。使用する言葉がすでに有している意味を踏まえながら、新しい宗教経験のもつ独自の意味を表現しうるような言葉の連鎖の中へ換骨奪胎していかねばならない。日常用語の連鎖をほぐして、思想表現の言葉の海へ投げ込み、その海の味をもった言葉に錬成して、新しい思想表現の文章連鎖を構築していかねばならない。

かくして構築せられた思想表現の内なる言葉は、宗教

体験の原点から発起し、それに接する人にまたその原点へと指向する経験を生み出すような作用をもったものとならねばならない。その意味で独創的な宗教家の表現は、その強烈な原体験を持続して、歴史を貫いて人間経験の中に宗教的超越性の体験を回復せしめんとしているものなのであろう。

親鸞の『教行信証』も、そういう宗教経験から生まれて、宗教経験を回復する使命を担った書であるに相違ない。しかるに、言葉というものは、その思想連鎖を感受した後世の人間の了解によって、誤解されて伝承されうるものである。むしろ「祖師の教が流行るのは、誤解された面でもてはやされるものである」（安田理深）ともいわれる。特に権力構造に密着した宗教情況のただ中に、「浄土宗」の名のりの下に新興の仏教として出発した法然の教団は、激しい弾圧の嵐をくぐらねばならなかった。長い仏教の思想的学問的伝承とも、真向から対決しなければならない思想的課題を担っていた。『教行信証』は漢文で書かれ、その思想的内容は高度な仏教思想史の論難に耐え、課題に応答するために、厳密な親鸞自身の思想的練磨を経ている。しかもこれを直接に読んで解釈することは、一般には長い間、許されなかった。江戸期を通じて『六要鈔』（存覚作）を依り所としてのみ、読むことが許されたのであった。

ある先生がこの度の『教行信証の思想』を見られて、「講録によらない初めての『教行信証』解釈が生まれた」と喜ばれたと聞いた。本書における親鸞解釈の方法論は、著者が先著『歎異抄の思想的解明』以来継続されてきた方法論である。それは『教行信証』の言葉を、できうる限り親鸞が語る文章の中で、彼が使う用語例に返して、彼自身の言葉の連鎖に即して、生きている本来の意味として取り出そうというものである。例えていえば、生化学的反応を、試験管の中の実験で証明するのではなく、生体内で生理現象として解明しようとする如き方法論である。慣れない読者は、あるいは本書の引用文の量に圧倒されて、著者の思想を読む前にすでに引用文を読むために疲労されるかもしれない。しかしその引用文は、著者が解明せんとする言葉の原意を、親鸞の思想表現の海に浮びながら味読しようとするような、著者の親鸞その人に対する無私の姿勢の表われなのであろう。更にいえば、要文を収集して、如来の大悲心の意図を語らせるのは、浄土の学びの伝統の方法論なのでもある。その方法論によって、親鸞没後七百三十年の歳月を隔てて、長い

誤解の雲霧を払った初めての『教行信証』論が生まれたのであるといえる。

そもそも、誤解された言葉を解きほぐすということの意味は何か。いうまでもなく、第一に歴史に埋没した史蹟を発掘するごとき意味があろう。しかしもっといえば、誤解の中に埋没した宗教的言語というものは、真の人間解放の志願を荷負すべき宗教経験の原意を発揮できていないのである。むしろ、時代状況に屈従して、あの法然・親鸞が受けた弾圧の意味を風化させているともいえるのである。それを新鮮な原体験として生きた感動と共に仏法の事実として呼び起こすところに、親鸞自身の文章連関の中で生きた言葉を把えなおす作業の真意があるのであろう。

本書の著者はどこまでも真直ぐに親鸞に直参して、彼の言葉に尋ね、彼の原意に迫ろうとされた。そしてそこから二つの事柄ついての開眼を恵まれたといわれる。

その第一は、親鸞聖人の回向の了解、ことに還相回向のそれであり、第二は聖人における師教の恩厚、つまり親鸞聖人と法然上人との間に結ばれた因縁の深さである。聖人の回向論については、もと私も「願生浄土」の章で「通念的了解」として述べたような理解をもっていた。一言でいえば、回向の法というべき本願の名号に帰した時、我われの生に往・還二つの方向をもった運動が始まる。このような了解である。（三頁）

この通念的了解の要点を著者は次のようにいう。

この見解の要点は、往相・還相を衆生に属するもの、すなわち如来の回向によって実現する衆生の生の相とすることであり、さらに如来の他力によって往生浄土しまた還来穢国度人天する主体を、「私共」とし「私たち」と了解していることである。端的にいうならば如来の回向によって往生浄土するのが「私たち」といわれる衆生であるのと同じように、「浄土からこの世へ済度に還る」もの、あるいは「浄土から穢土にたちかえり、あらゆる衆生を済度する」もの、それも「私たち」といわれる衆生であると了解されているのである。いわば往生浄土する我の歩みの展開上に、還来穢国する我が構想されているのであるから、この見解を率直かつ端的にいい直せば、往相道に立つ主体である我が、やがて還相行を行ずる主体であると了解され、主張さえされていることになるのであろう。（一四三―四頁）

それに対して親鸞その人の語る言葉に即して「回向」の義を尋ねるとき、世親・曇鸞の語を引いて語る意味はどうであるか。

方便力を成就し応化身を示して、衆生の生死の稠林の只中で教化の仏事を任運に行ずる菩薩に往生を全うして大涅槃を証したのち、やがて成っていく親鸞自身の相を教えられ、そして見たのであろうか。それとも「生死の園・煩悩の林」の中にあって、菩薩の大悲の教化を受けるべき「苦悩の衆生」に、自己を見たのであろうか。往相の形であれ還相の形であれ、大悲の回向は生死海に苦悩する衆生を摂取して仏道に立たしめようとする菩薩の行であると、曇鸞はいう。このような菩薩行の主体に、如来の回向によって「私たち」が当来の益としてやがて成っていくのであると、親鸞はこれら祖師たちの教説を読んで了解していたであろうか。あるいはまた、このような還相の菩薩行が、如来の回向に帰して往相道に立った「我ら」のところに、思いをこえて行ぜられていくのであると、親鸞は了解しかつ語ろうとしているのであろうか。それとも、「無明海に流転し、諸有輪に沈迷し、衆苦輪に繫縛せられて」出離の縁のない者としての自己を悲傷しつつ、その自己に大悲同感しつつ慇懃に教化して止むことのない「よき人」の仰せに、親鸞は菩薩の還相の恩徳を深く感佩していたのであろうか。我われは三思三省して、よくよく思いをひそめて考えるべきである。

（一五八頁）

といわれ、

往相の回向であれ還相の回向であれ、その根源にあるものは、一切苦悩の衆生を観察しそれを摂取して生死海を渡そうと作願して止むことのない、大悲心である。その大悲心が回向という形において、生死海に流転し苦悩する衆生にはたらくのであるが、その回向の端的な形は、本願の名号が我らに施与されてあるという事実そのものであった。これが親鸞がいだいていた独自の了解である……。我われの体験に立ってこのことを逆にいえば、回向の法である本願の名号の施与にあずかった時、衆生が今更のように深い感動と謝念の中に自証するもの、それこそが如来の大悲心であるということである。世親のいわゆる「回向為首得成就大悲心故」とは、この自証の表白そのものなのであろう。ともあれ往相回向で

あれ還相回向であれ、この二種の回向は大悲心の現にはたらく形であって、挙げて如来の恩徳であることを、我われは自見の覚悟に陥ることなく、明確に把握しなければならないことを強く思うのである。（二七二頁）

といわれる。「回向」という親鸞の思想の根本概念が、長い間、通念的理解のごとく誤解されてきたのである。大悲心成就を「如来の回向」と受けとめた親鸞の原点に帰り、「煩悩具足の凡夫」「生死罪濁の群萌」と自己の立つ地平を凝視し続けた親鸞の基点を失ってはなるまい。にもかかわらず、いつの間にか「我われ」が自分で菩薩行を行じうるようになると考えるようにしてしまうものは何か。それは親鸞の聞思の言葉を読みつつ、自我執心の座標軸にそれを移し変え、自力の努力意識が求める影としてしまうからではないか。著者は、その意味では、親鸞の言葉を読む座標軸を、決定して親鸞の視座に置き続けようとされたのであると思う。徹底して聞法者の位、仏願に随順する仏弟子の位に立って、愚鈍無智の輩と共に往生せんという法然の師教を受けて、「苦悩の群生海」に身を置くなら、いうまでもなく回向は二相ともに如来大悲の利益である。往相の利益が「教行信証」の四法という次第を取るのに対し、還相の回向は煩悩海中に身を投じて、大悲願心を行ずる相である。それを著者は曾我量深師の教示の下に、人身を示現して本願を説かれた善知識との出遇いのところにあるとされる。

種々の身をもってはたらく如来の応化身とは、我らを教化して仏道に向けしめる師教に帰した時、今更のように深々と自証される如来の恩徳の具体相である。阿弥陀という名で表わされる如来は、これらの報身とし種々の応化身として具体的にその恩徳を現前しているのであると、親鸞は了解したのであった。そしてこの応化身を「回向」という観点に立ってとらえる時、それはまさしく本願力のはたらく形としての、還相回向の具体相にほかならないことが、改めて知られるのである。師教の恩厚は、実はそのまま如来の還相回向の恩徳である。（一六一頁）

この観方については、先の通念的理解に慣れた耳には、なかなか聴き入れにくいところではあろうが、本書を熟読いただけば、懇切な著者の淳々として倦むことのない説得を通して、きっと了解いただけると信ずる。還相回向について、すでに曾我先生の教示をうけて考えようとしてきた愚生も、眼からうろこが落ちるごとくにうなず

かざるを得ないところがあった。誠にこの点の著者の分析と了解は、七百年の闇を破ったといってもよいほどの画期的な仕事であると仰がれるものがある。

そして著者のいう第二の事柄、「親鸞のもった師教への恩徳」、このことについても、本書の全編にわたって溢れるごとくに満ちているものを感ずる。親鸞が法然に対して懐いた想い、それは生死出づべき道としての仏道に、値う資格のない身にもかかわらず、本願の仏道に参入せしめられたという「感佩」である。著者はその想いを感動、謝念、感得、情熱等と語るが、なかんずく「感佩」の語に何か言い当てるものを見出だされたらしい。「佩」とは身に帯びることであるから、曇鸞の「服膺」に通ずるものであろうか。感動が身に染み、「そくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんとおぼしめし立ちける本願のかたじけなさよ」と常に述懐されたという親鸞の原体験たる初一念、この感動と感情を失うことなく『教行信証』の言葉を読み込んでいこうとされる著者の想いが、感佩の語に二重映しになっている。

このような態度で謙虚に親鸞その人の言葉を聴いていく著者であるが、読み込むにつれて、その了解を表現する著者独自の言葉が生まれてきている。これも言葉の性格上当然なのでもあろう。著者は親鸞の思想を「大般涅槃道」であるといわれる。このことを

一実真如のはたらきは、その広大無辺際の一実真如海である無上涅槃に帰る道を、衆生に開くのであるという。無上涅槃に帰る道をもし大般涅槃道と呼ぶならば、本願の名号に帰した称無碍光如来名という自覚的行為は、無明海に流転する衆生をまさしく大般涅槃道に立たしめるのである。（二四六頁）

「如来すでに発願して、衆生の行を回施したまう」とは、如来が衆生の貪瞋煩悩中に捨身して、帰命尽十方無碍光如来の如来の全体をもって、流転する虚妄の衆生がしかも大般涅槃無上の大道に立つ大地となろう、これがこの如来の大悲回向心を深く感佩した親鸞の、その感動が自証した名号の深い意味ではないであろうか。（二五〇頁）

回向の法である本願の名号に帰した者とは、そこに回施せられる真如一実の功徳によって、流転する虚妄の生を転じて大般涅槃道に立った者であるというにほかならないのである。（二五〇頁）

等という。大般涅槃という大乗の至極を表わす究意概念を、親鸞は確かにその文中に非常に積極的に使って、念

仏の信心がもつ具体的なはたらきを意味づけている。往生浄土の道の意味を、大乗の志願に照らしつつ、如来本願の大悲回向として、我らに成立するゆるぎなき仏道、そこに親鸞の信念の意味があることを表現されようとするのであろうと思う。

著者がいわれるように「先入観を排して」親鸞の語るところを聞きとることは、手易いことではない。その難しさは、恐らく、難値難見といわれ、唯仏与仏の智見といわれる本願力の境位をうかがう困難さである。著者はこの難関に立ち向いつつ、悠然として「如須弥山王」の風情であるが、その姿に接するものにもまた聞思への新たなる情念と勇気を恵まれる。この書に啓発されて、愚生もまたいくつかの課題を提示されたことであるが、稿を改めて考察してみたいと思っている。

真の宗教心から生れた言葉は、真の宗教心をまってその意が開示されるのであろう。その意味では常に新たに『教行信証』の言葉もこれから解明されていくことであろう。本書はそのことを、『大無量寿経』から生れた釈論もまた『無量寿経』と名づけうるのではないか、という。その意味で『無量寿経』の歴史的歩みの記念塔の位置を、本書がもつようになるのではないかとも拝せられることである。

〔平成二年四月刊　文栄堂　A5判　三四四頁　四、五〇〇円〕